

第18回 BACHスクリーンコンサート

2022. 12月

12月のテーマ ベートーベンの九番を聴こう

ベートーヴェンがシラーの詞『歓喜に寄す』にいたく感動し、作曲したと言われています。オーケストラの定期公演で取り上げられることは滅多になく、「第9は、餅代稼ぎのために年末にやる」という不文律のようなものが日本では定着してしまい、「年末特別公演」といった形でしか演奏されないからです。

いずれにしても、年末に第9を演奏するというのは、日本的習慣のようです。欧米では、新ホールのこけら落とし公演のように、「めでたい時に演奏する曲」ということになっています。

長野冬季オリンピック開会式に、小澤征爾指揮で世界各国の演奏家がリアルタイム演奏した生中継を観た記憶があると思います。

聴きなれた9番ですが、もうすこし曲に入り込んで聴いてみましょう。

- | | |
|-----------------|--------|
| 1. 聴きどころの解説 | 30分 |
| 2. 一万人の第九 佐渡裕指揮 | 20分 |
| 3. 交響曲第9番合唱付 | 1時間15分 |

指揮 尾高忠明、管弦楽 NHK交響楽団、合唱 東京オペラシンガーズ
ソプラノ/森麻季 ヲソ/加納悦子 テノール/櫻田亮 バリトン/三原剛



第九とCDの関係

CDはオランダのフィリップス社とSONYが共同開発しました。

開発段階で、フィリップス社は11.5cm(60分)を主張したが、当時SONYの副社長だった開発担当の大賀典雄さんが、最終的にヘルベルト・フォン・カラヤンが指揮するベートーベンの交響曲第9番(合唱付き)の演奏が入る12cm(74分)を主張し、このサイズになったと言われます。

11.5cm(60分)と12cm(74分)との二つの規格で二者択一の段階に来ていることをカラヤンに話すと、「[ベートーベンの交響曲第九番](#)が1枚に収まったほうがいい」と提言したと言います。ちなみに、カラヤンの「第九」は約65分です。

もっと長いオペラ曲もあるが、クラシック曲の95%はこのサイズに収まるようです

第1楽章 神秘的でちょっと空虚な静かな雰囲気が始まります。その後、急に深刻な感じでオーケストラが爆発します。旧約聖書の最初の創世記では、最初混沌としていた世界が次第に形になっていく様が描かれています。この楽章にもそういう雰囲気があります。これぞクラシックという感じの威厳のある楽章です。

第2楽章 スケルツォということで、おどけてはいますが、豪快な重量感もあります。ティンパニがが派手に活躍しますので、見ているだけでも楽しめます。その他の楽器についてもベートーヴェンの第7交響曲を思い出させるような、リズム感が非常に魅力的です。中間部にはオーボエをはじめとした木管楽器による美しいソロが出てきます。なお、この楽章は、繰り返しの仕方によって演奏時間はかなり変わってくるようです。

第3楽章 第9の中で、いちばん平穏で静かな楽章です。「天国的」な雰囲気があるとされますが、第4楽章に備えて夢の世界に入っているお客さんもちろほら見かけます。その睡眠...ではなく、天国的な雰囲気を破るかのよう最後にトランペットによる警告のようなフレーズが出てきます。ホルンの美しいソロ（ただの音階なのですが）も出てきます。これらが出てきたら、もうすぐ4楽章になります。ちなみに、4楽章でソロを歌う4人の声楽家は、3楽章の前に入ってくるケースが多いようです。そうでなければ、最初から合唱団といっしょにいるようです。また、3楽章と4楽章を休まずにつなげて演奏する指揮者も結構います。

第4楽章 第3楽章が静かに終わり、荒れ狂ったように第4楽章が始まります。この部分で先に書いたように1～3楽章の否定を行います。前の3つの楽章のメロディの断片が順に出てくるたびに、チェロとコントラバスで「このメロディではない」という感じで割り込んでいきます。まるで対話をしているようです。最後に小さく出てくるのが「歓喜の歌」のメロディです。ベートーヴェンが求めていた音楽は、こういう単純な音楽だということになるのでしょうか？このメロディが次第に盛り上がってくると、再度、第4楽章の冒頭と同じ音型が出てきます。この瞬間、大体合唱団がバツと立ち上がります。この光景を見ると、「年末だな」と感じるのは私だけでしょうか？その後、バリトンの独唱が始まります。日本語で書くと「オー、フローーーインデ」（日本語でない？）という感じ。ちなみに第9の歌詞はすべてドイツ語です。これは「おお友よ」という意味です。実は、この部分は、ベートーヴェン自身が作った歌詞です。その後始まる「フロイデ、シェーネル...」という有名な「歓喜の歌」の部分はシラーの詩です。その後合唱がこの部分を喜びいっぱい歌う有名な部分が続きます。その後急に神秘的な雰囲気になったり、トルコの軍楽隊的な伴奏の上で、テノールの独唱が始まったりと多種多様に展開していきます。次第に雰囲気が高まり、2重フーガになります。最後は、「人類みな兄弟」といった興奮した雰囲気で全曲が終わります。